

Folk art of TAMA



戦火で消失し再建された八日町の山車。
山車人形は雄略天皇（八王子まつり）



3匹の獅子で舞う美山町（みやまちょう）の
「ささら獅子舞」（八王子まつり）



八王子の芸者衆。一時途絶えていた
花街文化が再興された（八王子まつり）

緑豊かな自然と共に暮らしてきた多摩地域では、
自然への畏敬の念を帯びた神事や、江戸の流れを汲む
郷土芸能が数多く伝承されています。

五穀豊穡、雨乞い、悪疫退散などを祈願する「獅子舞」、
神と喜びを分かち合う「里神楽」、
また、養蚕や織物産地として潤った多摩では、
見事な山車で「屋台囃子」が演じられます。

祭りやお囃子文化は世代を超えた地域の絆を深めます。

舞や踊りのお面を作る面打師、伝統を守る多摩のだるま職人、

日本の豊文化をつなぐ豊職人など、

郷土を愛し、文化を受け継ぎつなぐ人たちに

日本の原点がありました。



多摩の芸能と職人

写真＝貝塚純一 文＝成田典子

多摩の地で受け継ぎつなぐ

多摩で育まれた郷土芸能
山車、お囃子、神楽、獅子舞…

多摩に伝承・保存されている郷土芸能の中でも特に多いのが約60カ所で演じられているという「獅子舞」です。腰に太鼓をくくりつけた雄獅子2匹と雌獅子1匹で舞う1人立ちの「三匹獅子舞」で、篠笛と、花笠をかぶった少女たちが「ささら」を持って伴奏に付きます。

奥多摩町・小河内には女装して踊る独特の「鹿島踊り」があり、日の出町の「鳳凰の舞」は鳳凰の冠をかぶり、雨乞い、悪疫退散などを祈願して舞うもので、いずれも国の重要無形民俗文化財に指定されています。

「万」江戸方面から伝わってきた「山車」や「祭囃子」も多摩で独特の発展を見せました。養蚕や織物業で栄えた多摩地域では、文化財クラスの立派な山車を抱えている町内も多く、中でも



おかめ、ひょっとこ、狐などに、観客の子供たちは頭を撫でてもらったり、握手してもらったりする。小さい子供はお父さんに抱えられ、獅子に頭を噛んでもらい、人に取り付いた邪気を食べて取り除いてもらう。



ひょっとこの面をつけ「バカ踊り」をするカイトくん。上町囃子連の師匠連にあたる留原(ととはら)囃子保存会では神楽も行っており、いずれ学んでいきたいという。



流派は神田流。江戸の祭囃子は、笛1、小太鼓2、大太鼓1、当り鉦(がね)1の5人囃子が基本。楽器は一通り担当し、ローテーションを組んで持ち回る。この日は「あきる野まつり」に参加し、小学生から高校生を中心にしたメンバーで構成。

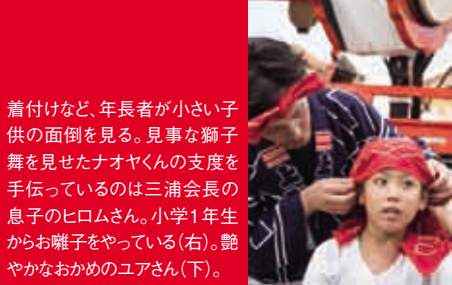
多摩の芸能と職人 ◆ Folk art of TAMA



今回狐でデビューしたシオンくん。狐は子供たちに人気があり、観客の子供たちが一緒に跳ねて踊っている姿もよく見かける。こうして子供は自然に踊りを覚えるという。



五日市では八王子のような立派な山車を持っておらず、もっぱら舞台の上でやる「居囃子(いばやし)」が主流だった。ある時トラックに乗せた山車を作ったらそれが好評であきる野に広まり、あきる野は「トラック山車」という独自の文化をもった。



着付けなど、年長者が小さい子供の面倒を見る。見事な獅子舞を見せたナオヤくんの支度を手伝っているのは三浦会長の息子のヒロムさん。小学1年生からお囃子をやっている(右)。艶やかなおかめのユアさん(下)。



お囃子の指導は、社会教育の一環だといいます。普段以上の力を出せ！いいところを見せろ！叱つても、理不尽でも、気持ちに通つていれば大丈夫。

祭りとお囃子で郷土愛を育てる。



囃子連

五日市上町囃子連

八王子では江戸後期から昭和初期にかけて、旦那衆たちが八王子の宮大工に建造させたという「彫刻山車」で豪華さを競っていました。屋根や柱に精巧な白木彫刻を施した「八王子様式」といわれる山車を生み出し、「彫刻山車の祭り」として関東一円に名声を馳せました。現在も19台が「八王子まつり」で華麗な絵巻を繰り広げています。

山車の舞台で観客を楽しませてくれるのが「お囃子」です。笛や太鼓で軽快な祭囃子を奏で、おかめ、ひょっとこが面白おかしく、獅子や狐がダイナミックに踊り、豪華な衣装で神楽を舞い湧かれます。東京の祭りが演奏のみのお囃子であることに対し、多摩ではお囃子に踊りが伴い、たくさん「囃子連」が腕を競っています。

家族のようでもあり

師匠と弟子、練習ではなく稽古

秋川溪谷の清流と緑豊かな山々に囲まれたあきる野市五日市は、歴史的

郷土芸能は世代を超えて

一緒にでき、年寄りが尊敬される

あきる野市には41もの郷土芸能団体があり、その特性を生かし「伝統芸能を通じ、郷土愛を育み、心豊かな住みよい故郷を作る」という市政が打ち出されました。3年前に「教育現場と地域をつなぐ教育」を目指し、中学校に伝統芸能部を創設することが提唱。手をあげたのは五日市中学校(お囃子)と東中学校(子供歌舞伎)でした。それにとない五日市上町囃子連や学校区域にある13団体の囃子連が「五日市中学校伝統芸能部後援会」を作りバックアップすることになりました。

難しかったのは、同じ神田流でも師匠が違いためバチの手や間に微妙な差のある子供たちをどうまとめていくかということでした。試行錯誤の上、基本的なことさえ決めておけば、柔軟性のある子供たちは、ちゃんと合わせる事ができたのです。〃流派〃が染み付いてい

価値のある寺社も多く、郷土芸能も盛ん。現在13の囃子連があり、「五日市上町囃子連」もそのひとつです。会員数65名で内23人が小学生から高校生までの子供会員。毎週水曜日に上町自治会館で、三浦伸雅会長などの指導の元、練習が行われています。あきる野市は今年「子どもを主役に据えたまちづくり」を打ち出したこともあり、子供たちが登場するお囃子場面も増えました。

号令がかかる子供たちは、きちんと正座して挨拶をしてから練習を始めます。三浦会長は鋭い眼差しで練習を見つめ、厳しく演技指導します。「うちの教育方針なんですけど、チャンスは平等だけど、結果は必ずしも平等ではないと話し、演目や条件にあったメンバーをオーディションして決めます。そうすると子供たちも納得するんですね。お囃子は地域の社会教育の一環だから、そういう厳しさも教えていかなければならない。これは社会の常だから」「子供たちとは小さい時から家族のようにつけていくけど、〃先生と生徒〃ではなく、〃師匠と弟子〃なんですよ。〃練習〃ではなく、お囃子は〃稽古〃。師匠と弟子は多少理不尽なことを言うたり、叱られても上手にコミュニケーションがとれているから大丈夫なんですよ」

る大人では、こうはいきません。

「あの子達が私たちの年齢になった時は、流派の壁もなく、平気で一緒にお囃子ができる時代になっているのかもしれない。そういう意味では中学の伝統芸能部は、すく先を行っていると思いますね」「〃郷土愛〃を育てるには、お祭りとお囃子が一番です。あきる野市長もそこに注目し、予算もつけてくれている。幼い子から90歳のお爺さんまで一緒にやるのは、こういう団体しかないと思います。なによりも年寄りが尊敬されますしね」

五日市上町囃子連は、昭和50年に三浦会長の父・源二さんが中心となって作ったといえます。ふるさとの先人たちが刻んできた良き伝統を未来へとつなげる



上／練習は正座で始まり正座で終わる。
下／厳しい眼差しの三浦会長。

■五日市上町囃子連 <http://i-kamicho.com/>



面打師

田中俊成さん

支えられ導かれて、この世界に來たのかな。

お面とお囃子^{はやし}が異常に好きな子供でした。11歳の頃、見よう見まねでお面作りを始めました。

難病で苦しんだ青春期、趣味のお面作りが心の拠り所でした。そしてたくさんの方が面打師^{めんうちし}へと導いてくれたのです。

無心になれるお面作りが
苦しい時を支えてくれた

「面打師」とは、能や狂言などの伝統的な「面^{おもて}」を作り上げる職人さんを行います。田中俊成さんは、神楽面や囃子面^{はやしめん}を得意とする面打師。お囃子の盛んな多摩地域の昭島市で育ち、よりよき歩きの時からお囃子が大好きで、お囃子が聞こえると感じていなかったといいます。

小学4年生の時に地元の囃子連「福島芝囃子保存会」に入りました。福島囃子は福島神社の祭礼囃子として嘉永年間に始められたもので、唯一「芝流」という流派を受け継ぎ、昭島市の無形民俗文化財に指定されています。田中さんは主に笛を担当し、祭囃子コンクールに何度も出場した腕前です。

それ以上に興味を示したのが神楽や



小学生や中学生の時に作ったお面を父が大切に保管してくれていた。裏には作った年代や年齢が書かれている。のびのびした個性的な作品だ。



⑥ 師匠の勧めもあり能面公募展に出した般若の面。能面は神楽面や囃子面と違い忠実な“写し”が基本。独特の“古色”の技法もある。とても苦勞したが「秀作」をいただいた。⑦⑧顔のバランスは大げさにすると漫画チックになり、リアルにすると生々しくなる。日本の伝統的な美意識、雰囲気というのがあり、ひょうきんさ、おかしみ、にくめなさなどを醸し出すのが難しい。同じものを作っても一つ一つは全部違うという。



いいお面に会おうと了承を得て型紙をとらせてもらう。時々型紙をあてて寸法やバランスを見る。お面には狐やおかめのほか、口の尖ったひょっとこ、おどけた男面などがあり、これら男面は総称して「バカ面」「道化面」「もどき」などとも呼ばれている。



お囃子の「お面」でした。「自分の作ったお面で踊ってみたい」と、小学5年生の頃に大工だった祖父の仕事場から木っ端をもらってお面を彫りはじめました。自己流の稚拙^{ちせつ}なお面でしたが、数をこなすうちに力をつけて立体的なものができるとになり、どんどん夢中になっていったのです。

しかし野球部のキャプテンとして活躍していた高校2年生の時、運命を大きく変えた出来事がありました。難病の突発性ネフローゼ症候群を患い、食事制限と長期入院を余儀なくされたのです。その苦しい時期に心の支えになったのが無心になれるお面作りでした。

卒業後、まだ体も本調子ではなく悶々としていたある時、偶然に新聞で羽村市の面打師 新井達矢さんが、22歳の



Mask Carver Toshinari Tanaka

①②ノミを使って“粗彫り”し、全体の形を見ながら鼻、額、頬を立体的に彫り出していく。下絵を描いて彫りを繰り返す。③ノミがずらり。これでも少ない方だという。④細部が彫り上がると“下地塗り”を行う。貝殻から作られる“胡粉(ごふん)”を均一に塗りサンドペーパーで磨く。⑤胡粉に顔料を混ぜて肌の“上塗り”を行う。最後に目、唇、歯などに彩色し、眉や髪の毛を描く。

史上最年少で能面公募展の最高賞「文部科学大臣奨励賞」を受賞した事を知り、とても衝撃を受けました。

新井さんも幼い頃からお囃子やお面が大好きで、羽村の囃子連に所属。笛がとでも上手で、田中さんは以前祭囃子コンクールで憧れの眼差しでその姿を見ていたのです。すぐにタウンページで「羽村の新井さん」を片っ端から調べ会いに行つたのです。新井さん23歳、田中さん19歳の師弟関係が始まりました。

人の心を動かして郷土芸能を
次の世代に伝えていきたい

2年ほど経ち腕もだいぶ上がってきた時にプロとして本格的にやっていく決心をしました。しかし収入が全くありません。閃いたのが駅前のロータリーで作業をしながらお面を販売する「路上の実演販売」でした。その時に出会った方がその後大きな支えとなってくれました。次々と注文をくれ、お客さんを紹介してくれ、また口コミで…という具合に広がっていき、未だ注文が切れることはありません。

師匠の新井さんは、現在も彫つたものにアドバイスしてくれたり、時には実演もする丁寧な指導をしてくれています。「大病したことで自然に引つ張られ、この世界に來たような気がします。たくさんの方に支えられて今があることを実



福島芝囃子保存会で笛の演奏をする田中さん。

■田中俊成さんの連絡先
神楽面・囃子面、根付けなどのオーダー、お面の修理などを承っています。
toshinari-610404@ezweb.ne.jp



1986年生まれ、29歳。羽村市在住。5年前に高校生からの付き合いだという好美さんと結婚。4歳と1歳半になる息子にも恵まれた。

感じており、本当に感謝しています。面打は誇りを持ってやっていますが、郷土芸能があつてこそ仕事です」
田中さんは福島芝囃子保存会で、今は指導する立場となっています。かつては「芸は盗め」「へたくそ、帰れ！」「やる気がねえなら来なくていい！」と手厳しい時代もありました。
「子供達を褒めてやる気にさせるのが今の時代。人の心を動かしてつなげていかなければなりません。郷土芸能は幅広い年齢層の人がひとつになれるのが良さだと思います。礼儀なども含めて学ぶので、武道とかのように「道」に近いものがあるのかもしれない」。

